

期末手当、40万円を要求



発行所
三池炭鉱労竹組合
大牟田市不知火町2
電話 3033 番
3034 番
編集兼
発行人 山下 開
半年間1,000円 送料共

大牟田地区の 夏季闘争状況

大牟田地評の「春闘共闘ピラ」による、主要単組の化学関係労組の期末手当が大幅にダウンし、中小企業は今からという段階。春闘におとろけずきびしい予想を伝えている。それだけに、これまで以上の統一と団結が強く求められている。ちなみに三化労組(合化東庄)の期末手当要額額は、今回二十八万五千円(前年同期四十万)。

国内炭の完全開発を

当面の諸闘争方針を確立

炭 労 大 会

炭労第八十回定期大会は、危機にある北炭管内炭鉱をどう再建するかという重大な課題などを内包する複雑な情勢を背景に、十三十五日の間東京で開催され、五十二年上期期末手当闘争(要求額四十万円)ほか当面する闘争の方針を確立した。

炭労大会は討論の末、かねて中央執行部から提案されていた当面の闘争方針を原案通り承認し、確立した。五十二年上期期末手当闘争にひきつづき、炭労は秋季年末闘争、炭鉱年金給付改善闘争と、闘争をすすめてゆくことになる。

次に、諸闘争方針の骨組を紹介しておく。

期末手当闘争方針

要求額は四十万円とする。

外員三十年勤続定年で二十万円。

石炭政策闘争

秋季年末闘争方針

目標の「退職手当増額」(抗)め。

北海道炭鉱手当の引き上げを

北炭については、政策闘争を

前面に押し出して闘う。また空知支部については、別に考えてゆ

件改善闘争を終ったあと要求を出し、十一月末決着を目指す。

現在ほぼ七百万円(「救護隊

手当増額」、「じん肺・せき損」

いずれも要求の詳細については

省略したが、それらの要求をつら

ぬくためにも、わが国のエネルギー

政策・石炭政策をどう確立して

ゆくかますます重要な課題とな

ってきた。

昨年十一月閣議決定を行なった



「今年も不況だよ！
わかるかなー？
わかんねえだろなあ！」

宮浦指導部電気分會新聞「交流」のNo.32
(5月20日発行)から。



鶴戸さん、感電死
組合、時限ストで抗議

三井独占資本はまた四山鉱(木村治敏)で、一人の坑内労働者の命を奪う重大災害をひき起こし、職場のはげしい怒りを呼び起こしている。

犠牲にされた人は鶴戸一徳さん。のところがトローリ線にぶれたたで、新聞がそのことを伝えた記事に「少年工」の名を使ったように電流がつつ走り、感電。まさに即死だった。

今春市内の某高校の電気科を卒業、ついで五月四山鉱に電気工として入社したばかりの、まだ「試用員」という身分に過ぎなかった。そのため、進級(特に西籍)の悲しみのほどが察しられていたもので、その間の保安教育の不十分さ、作業指示の不徹底などがそこに歴然として見られる。

鶴戸さんの死は、感電によるものだった。

十三日午前九時過ぎ、四山鉱五百十メートル坑道の五十五立入口から約五十メートル奥にはいった地点(坑口から六千メートル余り)のところで、鶴戸さんは炭坑内のケーブルを点検しようとして、翌日のパニック(継ぎ手の緩衝器)のふもとに乗った。

そのときおもむけごとに、首筋

力会 時の
日米防衛協
小委員

「共通の危険への対処」(安保条約五条)
「極東の平和と安全維持」(同六条)のために、軍事面をふくむ日米協力のあり方を研究・協議する日米安全保障協会の下部機関。日本の自衛隊を米軍の極東戦略に組みこむ。参謀本部で、日米両国政府が七月八日、設置に合意。九月にも第一回会合が開かれます。日本の外務省アメリカ局長、防衛庁防衛局長、統合幕僚会議事務局長、米側は駐日公使、在日米軍参謀長が出席。

【連合】

鶴戸さん、感電死

組合、時限ストで抗議

総合エネルギー政策の基本方針は、将来にわたる政策として前向きなものとなっていないという形勢で、新たに海外依存を強めてわれている。事実そのなかで「国内

なかでも、管内炭鉱では十三人の坑内労働者の遺体を坑底に残したまま水没させているほどで、いまいよ石炭政策は重要問題となっている。何と云っても、「国内炭の完全有効な開発をめざす石炭政策」の確立が不可欠だ。

差額支払い引き伸ばす

「メドたたため」とは何ごと

四月から賃金引き上げが実施を、四月分を九月、五月分を十月、六月分を十一月に支払ったものの、三池労組の強い要求にもかかわらず、会社はまた分からは、その概算払いを八月に引き上げによる差額の支払いから行なう(メド)をひきのばしている。

さらに一時金の二万五千円を会社によれば、差額支払いに払いについては、またその日取

こうして炭労は大会後ただちに体制を確立し、明年の春闘に向け政策闘争をすすめてゆく。

エネルギー政策・石炭政策が、炭鉱労働者の今後を制することがハッキリしてきただけに、この問題についてはさらに真剣な討議が重ねられるべきであろう。